

新年の集い New Year Concert

1月13日
14:00
(15:00終了予定)

【出演】
ヘイスティ ツー
hasty 2

SALA (歌とピアノ)
野村美樹子 (ピアノと鍵盤ハーモニカ)

会場:文京福祉センター湯島【洋室】

本日のプログラム

13:30 文京福祉センター湯島【洋室】開場

14:00 新年のご挨拶

14:05 新春コンサート (hasty 2)

- | | |
|-----------|----------|
| ・青い山脈 | ・赤とんぼ |
| ・東京キッド | ・七つの子 |
| ・上を向いて歩こう | ・たき火 |
| ・黄昏のビギン | ・雪の降る町を |
| ・川の流れのように | ・琵琶湖周航の歌 |
| ・故郷 | ・愛の讃歌 |

15:00 記念品の振る舞い



新年の集い

青い山脈

若くあかるい 歌声に
雪崩は消える 花も咲く
青い山脈 雪割桜 空のはて
今日もわれらの 夢を呼ぶ

古い上衣(うわぎ)よ さようなら
淋しい夢よ さようなら
青い山脈 バラ色雲へ あこがれの
旅の乙女に 鳥も啼く

雨にぬれてる 焼けあとの
名も無い花も ふり仰ぐ
青い山脈 かがやく嶺の なつかしさ
見れば涙が またにじむ

父も夢見た 母も見た
旅路のはての その涯(はて)の
青い山脈 みどりの谷へ 旅をゆく
若いわれらに 鐘が鳴る

東京キッド

歌も楽しや 東京キッド
いきで おしゃれで ほがらかで
右のポッケにや 夢がある
左のポッケにや チュウインガム
空を見たけりや ビルの屋根
もぐりたくなりや マンホール

歌も楽しや 東京キッド
泣くも 笑うも のんびりと
金はひとつも なくっても
フランス香水 チョコレート
空を見たけりや ビルの屋根
もぐりたくなりや マンホール

歌も楽しや 東京キッド
腕も自慢で のど自慢
いつもスイング ジャズの歌
おどるおどりは ジタバーグ
空を見たけりや ビルの屋根
もぐりたくなりや マンホール

上を向いて歩こう

上を向いて 歩こう
涙が こぼれないように
思い出す 春の日 一人ぽっちの夜

上を向いて 歩こう
にじんだ 星をかぞえて
思い出す 夏の日 一人ぽっちの夜

幸せは雲の上に 幸せは空の上に

上を向いて 歩こう
涙が こぼれないように
泣きながら 歩く 一人ぽっちの夜

思い出す 秋の日 一人ぽっちの夜

悲しみは星の陰に 悲しみは月の陰に

上を向いて 歩こう
涙が こぼれないように
泣きながら歩く 一人ぽっちの夜

一人ぽっちの夜 一人ぽっちの夜

黄昏のビギン

雨に濡れてた たそがれの街
あなたと逢った 初めての夜
ふたりの肩に銀色の雨
あなたの唇濡れていたつけ

傘もささずに僕達は
歩きつづけた雨の中
あのネオンがぼやけてた

雨がやんでた たそがれの街
あなたの瞳に うつる星かけ

夕空晴れた たそがれの街
あなたの瞳 夜にうるんで

濡れたブラウス 胸元に
雨のしずくか ネックレス
こきざみに ふるえてた

ふたりだけの たそがれの街
並木の陰の 初めてのキス
初めてのキス

新年の集い

川の流れのように

知らず知らず 歩いて来た
細く長い この道
振り返れば 遥か遠く
故郷が見える でこぼこ道や
曲がりくねった道 地図さえない
それもまた 人生
ああ 川の流れのように
ゆるやかに いくつも 時代は過ぎて
ああ 川の流れのように
とめどなく 空が黄昏に 染まるだけ

生きることは 旅すること
終わりのない この道
愛する人 そばに連れて
夢探しながら 雨に降られて
ぬかるんだ道でも いつかは また
晴れる日が来るから
ああ 川の流れのように
おだやかに この身をまかせていたい
ああ 川の流れのように
移りゆく 季節 雪どけを待ちながら

ああ 川の流れのように
おだやかに この身をまかせていたい
ああ 川の流れのように
いつまでも 青いせせらぎを
聞きながら

ふるさと

うさぎ追いし かの山
小ブナ釣りし かの川
夢は今も めぐりて
忘れがたき ふるさと

いかにおわす 父母
つつがなしや 友がき
雨に風に つけても
重いいづる ふるさと

赤とんぼ

夕やけ小やけの 赤とんぼ
負われて見たのは いつの日か

山の畠の 桑の実を
小籠に摘んだは まぼろしか

十五で姐やは 嫁に行き
お里のたよりも 絶えはてた

夕やけ小やけの
赤とんぼ
とまっているよ
竿の先

七つの子

鳥 なぜ啼くの 鳥は山に
可愛い七つの 子があるからよ

可愛 可愛と 鳥は啼くの
可愛 可愛と 啼くんだよ

山の古巣へ いって見て御覧
丸い眼をした いい子だよ

たき火

かきねの かきねの まがりかど
たき火だ たき火だ おちばたき
あたろうか あたろうよ
きたかぜびいぶう ふいている

さざんか さざんか 咲いた道
たき火だ たき火だ おちばたき
あたろうか あたろうよ
しもやけお手々が もうかゆい

こがらし こがらし さむいみち
たき火だ たき火だ おちばたき
あたろうか あたろうよ
そうだんしながら あるいてく

雪の降る街を

雪の降る街を 雪の降る街を
思い出だけが 通り過ぎてゆく
雪の降る街を

遠い国からおちてくる
この思い出を この思い出を
いつの日かつつまん
暖かき幸せのほほえみ

雪の降る街を 雪の降る街を
足音だけが 追いかけてゆく
雪の降る街を

一人心に満ちてくる
この悲しみを この悲しみを
いつの日かほぐさん

縁なす春の日のそよかぜ
雪の降る街を 雪の降る街を
いぶきと共に こみあげてくる
雪の降る街を

誰もわからぬ わが心
この虚しさを この虚しさを
いつの日か祈らん

新しき光ふる鐘の音

誰もわからぬ わが心
この虚しさを この虚しさを
いつの日か祈らん

新しき光ふる鐘の音

琵琶湖周航の歌

1.われは湖（うみ）の子 さすらいの
旅にしあれば しみじみと
昇る狭霧（さぎり）や さざなみの
志賀の都よ いざさらば

2.松は緑に 砂白き
雄松（おまつ）が里の 乙女子は
赤い椿の 森陰に
はかない恋に 泣くとかや

琵琶湖周航の歌

3.波のまにまに 漂えば
赤い泊火（とまりび） 懐かしみ
行方定めぬ 波枕
今日は今津か 長浜か

4.瑠璃（るり）の花園 瑞珊瑚（さんご）の宮
古い伝えの 竹生島（ちくぶじま）
仏の御手（みて）に 抱（いだ）かれ
て
眠れ乙女子 やすらけく

5.矢の根は深く 埋（うず）もれて
夏草しげき 堀のあと
古城にひとり たたずめば
比良（ひら）も伊吹も 夢のごと

6.西国十番 長命寺
汚れの現世（うつしよ） 遠く去りて
黄金（こがね）の波に いざ漕（こ）
がん
語れ我が友 熱き心

愛の賛歌

あなたの燃える手で
あたしを抱きしめて
ただ二人だけで 生きていたいの
ただ命の限り あたしは愛したい
命の限りに あなたを愛するの

頬と頬よせ 燃えるくちづけ
交わすよろこび あなたと二人で
暮せるものなら なんにもいらない
なんにもいらない あなたと二人
生きて行くのよ あたしの願いは
ただそれだけよ あなたと二人

固く抱き合い 燃える指に髪を
からませながら いとしみながら
くちづけを交すの 愛こそ燃える火よ
あたしを燃やす火 心とかす恋よ